

令和元年6月17日現在

機関番号：10102
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2016～2018
 課題番号：16K02914
 研究課題名(和文) タスクとコミュニケーションへの態度(WTC)の研究

研究課題名(英文) A study of communication tasks and WTC

研究代表者

横山 吉樹 (Yokoyama, Yoshiki)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：70254711

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)： 因子分析の結果、タスクをする際のWTCは、パフォーマンスへの志向をより包括したものへと変容し、その傾向は、意思決定型タスクよりもジグソータスクが高い値を示した。タスクの種類とL2使用に関しては、意思決定タスクの方が複雑さにおいて有意に高い結果が得られた。しかしながら、タスクをしている際のWTCは、ジグソータスクが有意に高い結果となっている。そのため、タスクによってWTCが高くなったからといって、それが第2言語使用の向上には結びついていない結果となった。さらに、予想に反して、事前に測った場合は、意思決定タスクのWTCが高く、第2言語使用の向上を予測する結果となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

タスクを用いる英語授業が推奨されているが、WTCや言語使用との関係を探る研究は少ない。これまでのWTC研究は、場に依存しない心理特性などの側面から行われ、場に依存する、とりわけ、タスクによって変化する、WTCに関しては、今まであまり顧みられることがなかった。本研究では、その存在を確認できたこと、そのツールとしてのアンケート紙を開発したことが、特筆すべきこととして挙げられる。残念ながら、タスクによるWTCの変化がL2使用に与える影響を示す結果は得られなかった。今後は、参加者の人数を増やすこと、タスクをする前とタスクをしている時のWTCの変化を質的に調べる必要があることが判明した。

研究成果の概要(英文)： The result of factor analysis showed that task-specific WTC was shifted drastically to more performance-oriented while the students are conducting the tasks, and this orientation was more frequently observed when they were doing the jigsaw task. With respect to L2 performance in relation to task types, the decision-making task significantly increased language complexity. However, higher WTC was observed when they were doing the jigsaw task, which conflicted with the results of L2 performance data. On the other hand, the pre-survey showed higher WTC in the decision-making tasks than in the jigsaw task, which unexpectedly predicted the increase of language complexity in the decision-making task.

研究分野： 第2言語習得のスピーキング

キーワード： WTC 第2言語習得 スピーキング

1. 研究開始当初の背景

第二言語習得研究において、コミュニケーションの意欲（WTC）は、心理要因の一つではあるが、実際のコミュニケーションに密接に結びつくものとして期待されている(Cao, 2011; Mac-Intyre et al., 1998; Yashima, Zenk-Nishide & Shimizu, 2004)。しかしながら、実際のL2使用に及ぼす影響を調べたものはあまりない。そのため、WTCが高いことが、実際のL2使用に好影響であるとする裏付けがないという問題がある。

2. 研究の目的

本研究は、場によって変化するWTC（state WTC）の中でも、タスクによって変化するWTC（以後、task-specific WTC）を主たる調査対象とする。また、それに影響を与える要因としてタスクの種類を挙げ、task-specific WTCがタスクの事前と事後でどのように変化するのかを調査する。また、従来の研究では、WTCを計測することに留まるものが多かったが、MacIntyre, et al. (1998)の第1層である「L2使用」に及ぼす影響も調査する。

3. 研究方法

本研究の質問紙を作成するにあたって、タスクの種類におけるWTCの変化を研究したTerashita (2016)を参考に作成した。質問紙は、ペアワークを課すため、「パートナーとの人間関係に関わる」質問、「タスクの内容に関わる興味・関心などに関わる」質問、さらに、言語パフォーマンスへの意識に関わる質問を設定し、5件法で回答するようにした。

国立大学の学生50名を対象者として、英語の習熟度試験を課した。その結果に基づき、30名の被験者を選定し、ほぼ同じ習熟度の者同士がペアを組み実験を行った。実験では、これからの行うタスクについて、研究協力者から説明を行った後に、WTCへの志向を調べるための事前アンケートを課し、タスク（individual work を→ pair work）を行い、事後に、回想法として、タスクをしていた時のWTCを回想するアンケートを行った。この2つのアンケートは、内容はほぼ同じであるが、質問項目の順番を変えて行うようにした。

4. 研究成果

Cao & Phillip (2006)では、クラス全体で行う活動よりもペア・グループ活動のほうがWTCは高くなる傾向があること報告した。Cao (2011)では、プロジェクトワークがWTCを高める活動であるという報告もある。今回使用した2種類のタスクは、いずれもペアワークであり、相互にコミュニケーションをとりながら、間違いを探す(ジグソータスク)、または、相手と話し合いながら最もふさわしいものを選び、その順位を決めていかなければいけないもの（意思決定タスク）である。Pica, et al. (1993)によると、ジグソータスクの方がより意味の交渉が図られるとされている。また、Yokoyama (2009)では、ジグソータスクより意思決定タスクの方が、言語の複雑性は高い傾向にあるという報告がなされている。

アンケートを主因子法によって因子分析し、タスクを行う前後でどのように因子が変化するのかを観察した（研究課題1）。結果は、事前と事後に行われた調査では、抽出された因子の数は、2つと同じであるが、因子自体は大きく異なる結果となった（表2・表3参照）。事前では、WTCはそれを支えるタスクの面白さやパートナーとの相性を巻きこんで一つの因子を形成した。また、言語パフォーマンスに対する志向は、WTCやその状況とは結びつかずに、独立した因子を形成した(表2)。それは、WTCが場に依存する志向を有し、state WTCの様相を呈していると言える。しかしながら、タスクを行っている時には、WTCは、言語パフォーマンスへの志向を包括したものへと変容し、それとは独立して、WTCを支える場の状況は1つの因子を形成した（表3参照）。それは、WTCがタスクをする上で必要となる言語パフォーマンスをより一層意識したもので、MacIntyre, et al. (1998)が唱え

るheuristic modelの最上部に位置するL2使用への志向を帯びてきたことを意味すると考えられる。つまり、WTCは、事前では、heuristic modelの下層にある場の状況に応じた要素（desire to communicate with a specific person, state communicative self-confidence）の影響を受けているが、事後に行ったタスクをしている時の調査では、その上部に位置するL2使用の影響を受けるということになる。

表1 事前アンケートの因子分析の結果

番号	項目	因子1	因子2
WTCを支える状況への志向 ($\lambda^2 = .663$)			
7	タスクの話しやすさ	.765	-.318
6	コミュニケーションの意欲	.671	.126
8	タスクの面白さ	.490	-.078
9	パートナーとの相性	.433	.144
言語パフォーマンスへの志向 ($\lambda^2 = .534$)			
11	英語の意図を工夫	.032	.663
10	英語の正確さ	-.082	.530
12	英語の流暢さ	.396	.424

注 因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiserの正規化を伴うバリマックス法

* 3回の反復で回転が収束

表2 事後アンケートの因子分析の結果

	項目	因子1	因子2
WTCを支える状況への志向 ($\lambda^2 = .879$)			
15	タスクの話しやすさ	.882	.211
19	内容の話しやすさ	.855	.160
20	パートナーとの相性	.738	.158
言語パフォーマンスを伴ったWTCへの志向 ($\lambda^2 = .755$)			
18	英語の流暢さ	.197	.725
13	コミュニケーションの意欲の維持	.441	.641
17	英語の意図を工夫	.114	.530
14	コミュニケーションの意欲の喪失 (逆転)	-.278	-.525
16	英語の正確さ	-.009	.525

注 因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiserの正規化を伴うバリマックス法

* 3回の反復で回転が収束

さらに、2要因のANOVAを用いて、タスクによってWTCへの志向が異なるのかを調査した(研究課題2)。結果は表3及び4に示すように、事前の調査では、意思決定タスクが、場に依存するWTCは低い、言語パフォーマンスへの志向が高く、ジグソータスクでは、前者は高いが後者は低いという結果となった(task: $F(1)=4.513$, $p=.042$, $\eta^2=.135$; orientation: $F(1)=0.000$, $p=1.000$, $\eta^2=0.000$; task*orientation: $F(1)=51.254$, $p=.000$, $\eta^2=.639$)。

事後に行ったタスク中のWTCへの志向に関しては、WTCの意欲を支える点でも、WTCとその言語パフォーマンスを伴ったWTCへの志向という点でも、意思決定型タスクよりもジグソータスクが高い値を示した(task: $F(1)=37.132$, $p=.000$, $\eta^2=.561$; orientation: $F(1)=0.000$, $p=1.000$, $\eta^2=0.000$; task*orientation: $F(1)=28.872$, $p=.000$, $\eta^2=.499$)。よって、事前と事後では、タスクによるWTCへの志向が大きく変化しているのがわかる。事前と事後の調査における因子が同じではないが、事前ではタスクの種類によって異なる志向を示しているが、事後に行った調査では、ジグソータスクが、意思決定タスクよりも、どちらの志向においても高くなっている。

対応のあるt検定を用いて、タスクの種類によって、流暢さ、正確さ、複雑さが異なるのかを調べた(表5参照)。結果は、流暢さと正確さにおいては、違いは見られなかった(それぞれ, $t(15)=1.76$, $p=.10$, $d=.39$; $t(15)=1.64$, $p=.12$, $d=.50$)。一方、複雑さにおいては、統語的、語彙的両方とも、意思決定タスクが有意に高いことが判明した(それぞれ, $t(15)=8.41$, $p=.00$, $d=3.5$; $t(15)=2.23$, $p=.03$, $d=.23$)。特筆すべきは、統語的な複雑さにおいては、効果量も大きく、有意に大きな差をもって異なっているのがわかる。しかしながら、語彙的複雑さにおいては、効果量も小さく、平均値と同じ位の標準偏差値がどちらのタスクにも見られることから、統計的には有意な差であるといっても、個人差が大きいという結果となっていることがわかる。

表3 事前アンケートにおけるタスク毎のWTCへの志向の記述統計

WTCへの志向	意思決定タスク		ジグソータスク	
	M	(SD)	M	(SD)
WTCを支える状況への志向	-.475	(.795)	.475	(.698)
言語パフォーマンスへの志向	.270	(.716)	-.270	(.802)

注 数値は因子得点

次に、WTCの志向性が異なる2種類のタスクは、L2使用の流暢さ、正確さ、複雑さに、どのような影響を与えたのか(研究課題3)について述べる。事前調査では、意思決定タスクは、WTCを支える状況への志向は低いが言語パフォーマンスへの志向は高く(表3参照)、それが、表5で示される複雑さの上昇に影響を与えていると考えられる。しかしながら、事後に行われた調査(表4参照)では、ジグソータスクが、WTCを支える志向だけでなく言語パフォーマンスを伴ったWTCの志向という要因も高くなっているにもかかわらず、L2使用に関しては、何ら有意な効果を及ぼさない結果となっている。一方、どちらの要因も低くなっている意思決定タスクにおいては、予想に反して、複雑さを上昇させている結果となった。このように、事前と事後に行われたWTCの調査は、L2使用の予測に関して全く異なる結果を示すこととなった。

本研究では、タスクを行う前とタスクをしている際のWTCの変化を観察した。結果は、タスクを行う前のWTCは、それを支える状況の一つとして要因を形成する(表2参照)ことから、state WTCの様相を呈していると考えられる。しかしながら、タスクを行っている時のWTCは、言語パフォーマンスへの志向を包括したもの、つまり、task-specific WTCの様相を帯びてくる(表4参照)。しかしながら、サンプル数が30と低いことから、この結果については信頼できるものとはなっていない(Hair et al., 1994; Kline 1994)。そのため、今後は、十分なサンプル数を確保し、実験を行い、今回の結果を検証する必要がある。

タスクの種類とL2使用に関しては、意思決定タスクの方が複雑さにおいて有意に高い結果が得られた。しかしながら、タスクをしている際のWTCは、ジグソータイプが有意に高い結果となっているので、WTCが必ずしもL2使用には結びついていない結果となった。さらに、予想に反して、タスク中のWTCよりも、事前に測ったWTCの方がL2使用を予測している結果となった。よって、本研究の結果は、Task-specific WTCは、L2使用に影響を与えていないことを示している。

表4 事後アンケートにおけるタスク毎のWTCへの志向の記述統計

WTCへの志向	意思決定タスク		ジグソータスク	
	M	(SD)	M	(SD)
WTCを支える状況への志向	-.651	(.869)	.651	(.382)
パフォーマンスを伴ったWTCの志向	-.021	(.911)	.021	(.821)

注 数値は因子得点

表5 タスクの種類における流暢さ, 正確さ, 複雑さの記述統計

	意思決定タスク		ジグソータスク	
	M	(SD)	M	(SD)
流暢さ	81.97	(22.66)	74.49	(14.28)
統語的複雑さ	1.28	(0.12)	1.02	(0.01)
語彙的複雑さ	14.83	(16.82)	11.44	(12.84)
正確さ	82.71	(7.41)	86.05	(5.90)

この予想に反した結果は, Cao (2011) や MacIntyre & Legatto (2010) が主張するように, WTC が dynamic system として機能している結果と言えるかもしれない。つまり、タスクの種類などの状況的要因だけでなく、心理的要因も複雑に関わり合って、WTC が、言語パフォーマンスに影響を与えるということを示唆しているかもしれない。また、考えられる他の要因としては、タスクをしている際の自らの WTC や L2 使用に関して、実験参加者の振り返りが、実態を反映していないという可能性がある。数名からのインタビューであるが、複雑さが増加している学生であっても、予想したようにうまくしゃべれなかったと述べていた。

本研究は、予想したような結果とはならなかったが、WTC と言語パフォーマンスを研究する上で、重要な示唆を与えものである。それは、state WTC の一つとして task-specific WTC があり、それはタスクする以前に予想するものとタスクをしている時に意識するものでは大きく変容することが確かめられた。また、これまでの WTC 研究と異なり、本研究は事前と事後に調査を行った。それによって、事前にしたもののほうが、予想した結果と近いものとなった。これは、学習者は、実験が終わった後で、実験中の言語パフォーマンスを正確に振り返ることができるのかという疑問を投げかけている。このような第2言語学習者要因も、WTC 研究の実験における今後の課題としていかなければいけない。

引用文献

- Cao, Y. (2011). Investigating situational willingness to communicate within second language classroom from an ecological perspective. *System* 39, 468-479.
- MacIntyre, P.D., Clément, R., Dörnyei, Z., Noels, K.A. (1998). Conceptualizing willingness to communicate in an L2: a situational model of L2 confidence and affiliation. *Modern Language Journal* 82, 545-562.
- MacIntyre, P.D. & Legatto, J.J. (2010). A Dynamic System Approach to Willingness to Communicate: Developing an Idiodynamic Method to Capture Rapidly Changing Affect. *Applied Linguistics* 32(2), 149-171.
- Hair, J.F. Jr., Anderson, R.E., Tatham, R.L., and Black, W.C. (1998) *Multivariate data analysis*. 5th ed. Upper Saddle River, N.J.: Prentice Hall.

Noels, K.A. (2001). New orientations in language learning motivation: Toward a model of intrinsic, extrinsic, and integrative orientations and motivation. In Z. Dörnyei, & R. Schmidt (Eds), *Motivation and second language acquisition* (pp. 43-68). Honolulu, HI: Second Language Teaching & Curriculum Center, University of Hawaii.

Trashita, K. (2016). WTC fluctuation and task performance on the Japanese EFL context. Unpublished M.A. thesis, . Hokkaido University of Education, Hokkaido, Japan.

Yashima, T., Zenuk-Nishide, L., Shimizu, K. (2004). Influence of attitudes and affect on willingness to communicate and L2 communication. *Language Learning* 54, 119–152.

Yashima, T., MacIntyre, P.D., Ikeda, M. (2018). Stimulated willingness to communicate in an L2: Interplay of individual characteristics and context. *Language Teaching Research* 22 (1), 115–137.

八島智子(2004).「外国語コミュニケーションの情意と動機 研究と教育の視点」大阪:関西大学出版部。

5 . 研究成果

[雑誌論文] (計 2 件)

2016. 山下純一 志村昭暢 臼田悦之 竹内典彦 河上昌志 中村洋 小 山友花里 沢谷佑 輔 横山吉樹 萬谷隆一. タスク性からみた中学校英語教科書のコミュニケーション活動について—教科書間の比較 とタスク性に差が出る要因 - 北海道英語教育学会紀要 16 19-34.

2019. 横山吉樹. 2018. コミュニケーションへの意欲 (WTC) とタスクについて. 北海道教育大学紀要 (教育科学篇) 70 (1) (印刷中)

[学会発表] (計 2 件)

2017. 山下純一 小山友花里 中村洋 志村昭暢 臼田悦之 横山吉樹. タスクを取り入れたスピーキング活動の実践 - 中学校・高校の接続の視点から - . 全国英語教育学会島根研究大会.

2017. 山下純一 竹内典彦 酒井優子 中村洋 河上昌志 小山友花里 横山吉樹 照山秀一 臼田悦之 萬谷隆一. 中学校英語教科書のコミュニケーション活動の分析 - タスク性とタスク分類項目の関係から - . 全国英語教育学会島根研究大会.

2018. 横山吉樹. コミュニケーションへの意欲 (WTC) とタスクについて. 全国英語教育学会第 44 会京都研究大会.